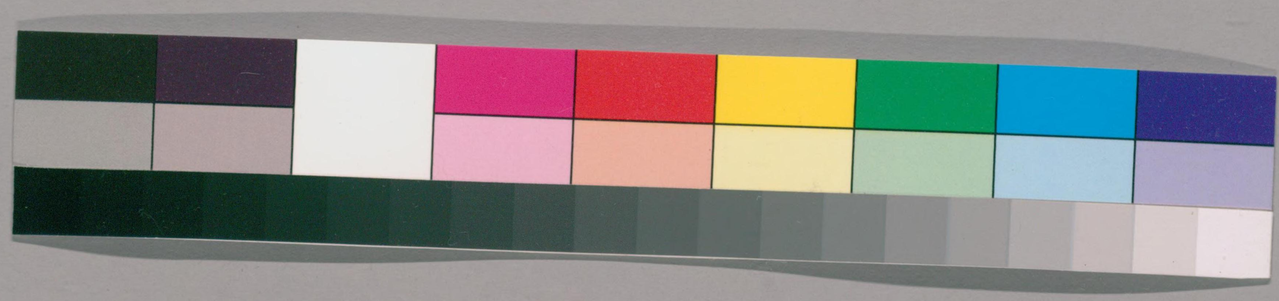

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『堀河院百首』　請求記号 857-38

堀河院百首和歌

秋

立秋　七夕　萩

荻萱　蘭　萩

露　霧　擣

擣衣　虫　菊

冬

雁　鹿

駒迎　月

紅葉　九月盡

国立国会図書館　タイトル『堀河院百首』　請求記号 857-38

ガラス使用

初冬　時雨　霜
寒蓋　千鳥　氷
神樂　雁鳥狩　炭竈
　　　　　　　霰　雪
　　　　　　　水鳥　網代
　　　　　　　爐火　除夜

秋

左秋

やどごとに衣うつ夕嵐吹なれて秋も有社淨けれ　公實
朝ごとに紀秋のくもりなせそ色あまたにて人の染ぬる　匡房
約繩ながくも愛神のさしもさがし我寢やよりや秋のちぎりん　國信
吹つるはうらもなし吹風の音にぞ秋ハ命とまりける　師教
物ごとに紀秋よ風の涼しきは虫の聲よりまさりけれ　源重
秋ごとにいまこの山の山颪ぞ紅葉の錦手向くるかな　仲宗
手ごとあつる秋ハ風よりまさりけれ　俊頼

国立国会図書館　タイトル『堀河院百首』　請求記号 857-38
ガラス使用

まをさけ萩のした葉も風吹て秋さきにけりと人はをとろかす
吹風の萩のした葉のうつろふを見つゝも日数へにけり　師時
秋おくる旅にしる哉ゆく秋をとゞめぬ萩のした葉と　基俊
秋立と今はきゝしを吹風の音さへ涼しやどの萩原　隆源
物ごとに秋ちかきのみ聞ゆるは風のあしたの声にぞ有ける　肥後
秋のくるきざしを誰かしらせけむ風のおとさへ涼しかりけり　紀伊
いつしかと待ちわびぬるは秋ごとの風のおとにぞ有ける　河内

七夕

天の川あふ瀬もしらぬ七夕よ渡りそめてや年をへぬらん　公實
漢川秋をも月をもろ共に契初てん　基俊

織女にあふ夜ぞ露けきあまの川渡りそめてや年をへぬらん　國信
天川あふ瀬を知れ七夕のくる夜ひと夜はなれなわびしき　師教
彦星のあふ瀬の秋の夜半ごとに涙の川の水まさるらん　師時
七夕のあふ瀬の秋の夜半ごとに涙の川の水まさるらん　後教
七夕のあふ瀬の空をながめつゝ天の川波あかしつるかな　仲実
天川波あけがたにこぐ舟はあふ瀬の秋の心なるらん　基俊
あふ瀬まつ舟出よりこぐ天の川波あけがたの空ぞ恨めし　逢源
七夕の別の袖の露ながら天の川波あけてこぐ舟　肥後

国立国会図書館　タイトル『堀河院百首』 請求記号 857-38
ガラス使用

織女の手ぶりのたしなみなどひとしほなるひくらしの秋や七夕　机よ　河内

萩

ひまもなく雨萩志ぐれ鹿の声みだれてなびく野辺の秋風　参賀

残萩いまさかりにうつろひぬ露なき庭に鹿ぞ鳴くなる　匡房

二夜ふりわたる霜に染まさる萩の花　師教

萩ちるも志ぐれもろともふりぬれば庭ぞまばらに鹿の声　伊実

ふりもせぬ志ぐれにさそふ萩の葉の風にぞ秋の色は見えける　公重

秋萩の垣根の露のよなよなをひくらしぞ鳴く　後教

時雨ふる夜半の嵐に萩折れて鹿の音遠き小野の秋風　師教

あさぢふや露もまだひぬ萩の葉に鹿の音遠き小野の秋風　伊実

鹿の音も聞えぬ山の萩の葉に露ぞ残れる秋の夕暮　基俊

綿のやうに花とみゆるは萩の葉に露ぞ残れる秋の夕暮　隆源

志めゆふもろともにこそ萩の葉の露ぞ残れる秋の夕暮　北後

墨染の志げき萩原ふりぬれば露ぞ残れる秋の夕暮　紀伊

ふる雨は野辺の草木を染めかへて萩ぞ残れる秋の夕暮　河内

女郎花

幾千代か一日も萩の露の間に女郎花咲く秋の野の原　参賀

女郎花咲く秋の野の萩の露ぞ残れる秋の夕暮　匡房

国立国会図書館　タイトル『堀河院百首』　請求記号 857-38

ガラス使用

夕されば小倉の里に鳴く鹿は
露や悲しき秋の調べぞ　幽信

萩の葉に風の音こそ聞えけれ
露こぼれ置く庭の秋萩　師教

秋萩に置く白露は玉なれや
貫きかくる蜘の糸すぢ　仲実

いとゞしく虫の音しげき浅茅生に
露の玉敷く小野の萩原　後教

秋萩の下葉色づく夕暮に
ひとり鳴くなる鹿の音ぞ悲しき　基俊

秋萩の枝もたわゝに置く露を
分きて染むるは誰が心ぞ　逢源

秋萩の下葉もいまだ染めねども
露の寒けき色ぞ見えける　肥後

夕されば野辺の秋風身にしみて
鶉鳴くなり深草の里　俊成

夕されば門田の稲葉おとづれて
芦のまろやに秋風ぞ吹く　寂蓮

秋風にたなびく雲の絶え間より
もれ出づる月の影のさやけさ　西行

秋風の吹くにつけても人の
言の葉ぞ先づ下葉色づく　寂蓮

秋風の吹きにし日より音羽山
峰の木の葉の色まさりゆく　左京大夫顕輔

秋風の吹きにし日より音羽山
峰の木の葉の色まさりゆく　左京大夫顕輔

秋風に声を帆にあげ行く舟は
天の戸渡る雁にぞありける　源経信

秋風に初雁がねを聞く時ぞ
いとゞ旅寝の数も知らるゝ　藤原為家

秋風に吹かれて鳴くや鶉らん
深草の里を来てこそ聞け　藤原定家

秋風に吹かれて来ぬる雁がねの
つばさに霜や置きまさるらん　藤原仲実

秋風に吹きまがへた

一ふきまきちらす山の秋風に
見こゝろまどふもみぢ葉の色
ふかき夜の雨にしをれてうつろ
ひぬ花ものこらぬ秋の木の下
夕雲の絶まに見ゆる月かげも
秋風になびく雲ぞ行かくす
あらし吹く庭もまばらに散る
ものを猶ふりしく落葉かな

前大僧正慈鎮

秋ふかみこゝろ有とも思ふ
こそ有しも物を思はざりけり

入道前関白太政大臣

師時

肥後

紀伊

河内

散ぬ間をいとゞ惜むや秋の
色のうつろふ庭の木の葉に

前大僧正慈鎮

國信

うつろふも猶惜むやそのこ
ずゑ散ぬる秋の名残なれば

前大僧正慈鎮

師教

うつろはぬ物思ふ人の心や
は秋の夕の名残なるべき

前大僧正慈鎮

慶政

朝毎にたえぬ涙をもよほし
て君こゝろみよ秋の夕風

前大僧正慈鎮

仲実

さゝぬさへ袖にしぐるゝ秋
の雨を猶ふりそふる庭の松
風

前大僧正慈鎮

後教

かゝるやと我身ながらあや
ぶまれ秋の夕の風の涼しき

前大僧正慈鎮

師教

夏のうちの暑さを秋の風ま
でも猶ふきそふる庭の松風

前大僧正慈鎮

教舜

秋ふかみ露も袖あれうつろ
ふや庭の木葉の風の涼しき

前大僧正慈鎮

基後

澄源

肥後

国立国会図書館　タイトル『堀河院百首』　請求記号 857-38

ガラス使用

色そえよ吹く秋風そうやよいかにさもあれ秋風よみそうそうやよいかにさもあれ秋風よみそうそう　紀伊　河内

蘭

あさぢはらさてゆふ露のおれ伏すは秋の葉毎のうへの玉かもあさぢはらさてゆふ露のおれ伏すは秋の葉毎のうへの玉かも　延喜　公實

秋の野をふしつつ行けばおのづから袖もにほひぬくちなしの花秋の野をふしつつ行けばおのづから袖もにほひぬくちなしの花　師時　歌仲

秋の野を書きつる文は萩の葉毎にそおくつゆのみそ秋の野を書きつる文は萩の葉毎にそおくつゆのみそ　延喜　國信

萩の葉ごとに露おく旅の空秋の野風やいかに吹くらん萩の葉ごとに露おく旅の空秋の野風やいかに吹くらん　紀伊　師秋

秋毎よ萩のしたばのうつろひぬ露のやどりは風よりぞ散る秋毎よ萩のしたばのうつろひぬ露のやどりは風よりぞ散る　延喜　公實

あさぢ風の目もあや吹く萩の葉をそよとばかりに鳴く鹿の声あさぢ風の目もあや吹く萩の葉をそよとばかりに鳴く鹿の声　師時　歌仲

ぬしやたれ今は萩原分けてとふ露のやどりは風よりぞ散るぬしやたれ今は萩原分けてとふ露のやどりは風よりぞ散る　延喜　公實

詠田山麓よ句ふらけるあれはてて書く文の末の露の色詠田山麓よ句ふらけるあれはてて書く文の末の露の色　肥後　隆源

萩ばかり露のやどりは風よりぞ散る秋毎よ萩のしたばのうつろひぬ萩ばかり露のやどりは風よりぞ散る秋毎よ萩のしたばのうつろひぬ　紀伊　河内

秋雲やたちこめんとすらん萩の葉毎に句ふ露の色秋雲やたちこめんとすらん萩の葉毎に句ふ露の色　河内　延喜

萩さそふゆふべの風よ小野の萩のうへの露をば吹きな乱りそ萩さそふゆふべの風よ小野の萩のうへの露をば吹きな乱りそ　公實　延喜

おきつやとしほの萩の風もとめて吹きな乱りそ小野の萩の露おきつやとしほの萩の風もとめて吹きな乱りそ小野の萩の露　延喜　師時

国立国会図書館　タイトル『堀河院百首』　請求記号 857-38

ガラス使用

秋の夜のふけゆくままにおのづから
さゆる袂の露ぞくだくる　國信

山里に吹たえまする秋風の
音にぞ夜ぞふけまさりける　師教

萩の葉のそよぐ音こそ秋風の
吹くにしもあらぬ心地すれ　仲実

萩の葉に吹きしをりかと思ふまで
ちるもの音は露にぞありける　俊恵

秋風のやどるたもとにつゆ置きて
袖のみ濡るる萩の下葉を　師時

秋風のふくにつけてもこぼれ出る
涙ぞ露の数をそへける　仲宗

萩の葉に吹きしをりかと思ふまで
ちるもの音は露にぞありける　俊恵

秋風のやどるたもとにつゆ置きて
袖のみ濡るる萩の下葉を　基俊

秋風のふくにつけてもこぼれ出る
涙ぞ露の数をそへける　師時

萩の葉を吹こしをりもおもかげに
さらでてそよぐ秋のくれかな　紀伊

鴫

雲井よりなれのみ聞くものかはと
思ふ心ぞ初雁の声　公實

秋霧のたちかくしつつ鳴くなれど
しるきは雁の涙なりけり　通房

しのの戸のわたりの笹も踏みわけて
鳴くしかの音ぞ聞くべかりける　國信

秋萩の花ずりの衣ぬぎ着つつ
鳴くしかの音ぞ聞くべかりける　師教

高砂の尾上の松の声ならし
ひとりにしきの衣うつなり　仲実

庭もせにちりしく萩の葉をしげみ
ひとりにしきの衣うつなり　俊恵

国立国会図書館　タイトル『堀河院百首』　請求記号 857-38

ガラス使用

雲そくれなゐのうす紅葉つゆ霜のまがきに
春秋の行くへ知らぬ思ひ哉　師時
すみ渡るよはの月かげさやけくて
猶うらさびし秋の初風　孔仲
初霜のふりしく朝の白菊は
こゝろの色もそれとこそ見れ　基俊
雲ゐまで聞えあげたる鹿の音を
雲と聞なす秋の初風　肥後
雲とのみ聞えし鹿の声すなり
秋の夜ふかき峯の松風　澄源

鹿

秋ふかみ尾上の鹿の声よわし
かよふ心のたえやしぬらん　公實
秋の野に人まつ虫の音をたてゝ
なくなくこふる鹿ぞ鳴くなる　紀伊
秋の色を染てやすらん山里の
外面の小田の鹿の鳴くらん　師時
秋ふかき山の紅葉ふみわけて
鳴くしかの音に色ぞ見えける　孔仲
秋の野の草葉をなべて吹風に
よもすがら鳴く鹿の声かな　基俊
ふもとまで聞えあげたる鹿の音を
雲と聞なす秋の初風　肥後
秋ふかき山の紅葉ふみわけて
鳴くしかの音に色ぞ見えける　孔仲
世中は秋をぞ知るしかの音の
よわりまさるを聞くにつけても　後教
雲ゐまで聞えあげたる鹿の音を
雲とのみ聞なす秋の初風　澄源
秋ふかき山の紅葉ふみわけて
鳴くしかの音に色ぞ見えける　肥後

国立国会図書館　タイトル『堀河院百首』　請求記号 857-38
ガラス使用

あくるまで夜もすがら雁の鳴くを聞きてよめる　紀伊

秋霧のつつめどもたつ雁の声ぞ聞こゆる　河内

暮

山ぞひの風よりおろす白雲の絶えまがちなる秋の夕暮　公實

月澄めばもる人もなき秋の夜をたれ待ちえてか虫の鳴くらん　匡房

露ながらをりて折らばや女郎花あだし男の形見ともせん　國信

志賀の浦や遠ざかりゆく波間よりなほ現れて出づる月影　師頼

風吹けば先づちるひぐらし秋の夕暮生けるかひなくも鳴くかな　公實

白露よ消えばともかく草の葉をおきどころなき玉と乱るな　匡房

如何にせん物思ふ袖を萩の露もとの雫に色まさりけり　仲實

秋風の吹くにつけても人の見ぬ我が宿ぞ先づ荒れまさりける　俊頼

秋夜たれもろこしまでの月を見て我が故郷を思ひやるらん　師時

小篠原思ひ乱れて我ぞまづ妻こふ鹿の声を聞きつる　孝仲

淋しさは宿も人目も草も木も枯れ行く冬の夕暮れの空　基俊

霜

白菊の花のほかには見えぬかな置きまよはせる霜の下葉も　匡房

月ふかみ千鳥鳴くなり須磨の関吹きこす風に霜や寒けき　紀伊

初日さす小篠が原の霜よりもあるかなきかの我が身かな　河内

霰

霰ふる外山の里の柴の戸を誰とか聞きて人の訪ふらん　公實

小篠原ふしみの里の夜の霰ふるとは人に告げこそすれ　匡房

国立国会図書館　タイトル『堀河院百首』　請求記号 857-38

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『堀河院百首』　請求記号 857-38

ガラス使用

あさうなのなみも深れ南まで　師時
秋くれば雲井もうすくなりまさる　乳仲
雪ふれば霜もさえしき朝戸出の　基後
あさうかはりのさえ夜かな　澄深
河ごろもかりてかへさぬ旅の空　肥後
志のめぐみなれこし程の日数を　紀伊
ゆきてみん時の春もわすれ草　河内

駒迎

逢坂の関路やいかに秋の雨も　公實
逢坂は雲の名ながらふれてさえ　道雲
やまをみてあすも月のまよ

二夜の宮うつりも故郷をこえみやこより月の　國信
故郷のきりやちぬさとりぬらん　師教
引連もせぬ物思ひまで　師教
逢坂の関よりはるかに月のみ　俊重
逢坂の関よりはるかに月のみ　俊重
逢坂の関よりはるかに月のみ　俊重

教長
逢坂の関の秋の夜の月
月
きやうなれや月うき秋のしの荻
吹こもうき涙の袖のあなうらに
嵐吹いこの世のあれ
天の原雲ゐの月を詠れば秋のよ
山の端よいさこよ月の
秋を経る我も今こそあめそ
袖しもおくらしなよ秋風
末松の雪夜もふなひさしくて
月のまつみのうかり

紀伊
河内
法房
公實
國信
師教
教長
仲實
後教

言のなこそあはれ
かりもめのうき名の水八
なのよ園さこ月
月新八今行め
久堅の月後
おもつ
精衣
こひつや嘆うつらん唐衣
衣うつ
ものねとうあのひ
ふさ衣の

師時
教仲
入豊
河内
盛後
紀伊
三實
法房

国立国会図書館　タイトル『堀河院百首』　請求記号 857-38
ガラス使用

ものおもふころはわが身にあるものと知りながらもなほかなしきは　紀伊

枯れ果てしのべの草のかれがれにものを思ふと人の知るらん　師教

夜もすがらものおもふころは明けやらで閨のひまさへつれなかりけり　俊成

夜もすがらものおもふころは明けやらで閨のひまさへつれなかりけり　後教

ものおもへば沢の蛍も我が身よりあくがれいづる魂かとぞ見る　和泉式部

ものおもへば沢の蛍も我が身よりあくがれいづる魂かとぞ見る　師時

ものおもへば袖に玉散るとこたへよ人の問ふまで何の涙ぞ　俊成

ものおもへば袖に玉散るとこたへよ人の問ふまで何の涙ぞ　後教

ものおもへば袖に玉散るとこたへよ人の問ふまで何の涙ぞ　隆源

ものおもへば袖に玉散るとこたへよ人の問ふまで何の涙ぞ　肥後

ものおもへば袖に玉散るとこたへよ人の問ふまで何の涙ぞ　国信

ものおもへば袖に玉散るとこたへよ人の問ふまで何の涙ぞ　師教

ものおもへば袖に玉散るとこたへよ人の問ふまで何の涙ぞ　教季

ものおもへば袖に玉散るとこたへよ人の問ふまで何の涙ぞ　仲実

ものおもへば袖に玉散るとこたへよ人の問ふまで何の涙ぞ　後教

ものおもへば袖に玉散るとこたへよ人の問ふまで何の涙ぞ　師時

ものおもへば袖に玉散るとこたへよ人の問ふまで何の涙ぞ　教仲

ものおもへば袖に玉散るとこたへよ人の問ふまで何の涙ぞ　基俊

[illegible]
山里は秋の夕ぐれ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

雪もよに物さびわたる雑の気色の所なれば
うたてこうつろふ菊に村雨すぎてすさまじき
紅葉　　紀伊
時雨ゆゑ物さびまさる袖の色に
唐にも我やそめてまし　　河内
露のこと玉のうてなの紅葉こそ秋を
筆だにまゐらせよ　　匡房
秋の色をこの里の紅葉にぞ見る
深き心の程は知れ　　國信
白露のうつろひやすき紅葉をば何
重山とぢこめつらむ　　肥後
山風のさそひもあへず散る紅葉
誰かは秋を惜しまざるべき　　俊頼

おきそめやくもりも知らぬ雪の夜の
紅葉すさくもるとはなくて　　肥後
散る木の葉ふりぬる時雨ふるさとの
軒端の紅葉色ぞ残れる　　俊頼
九月盡
今のみと秋をも惜しむ菊の花
あすより後は誰か見るべき　　公実
あすよりは秋はあらじと思へばや
今日の暮をも人の惜しむ　　匡房

国立国会図書館　タイトル『堀河院百首』 請求記号 857-38
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『堀河院百首』　請求記号 857-38

ガラス使用

いつとなく秋の名残を惜まし風吹き
敷へとりや冬にこそ来ぬ菊の花
松ばかりきのふの夢と葵とて
等や冬にこそ来ぬ菊の花
冬きくとこそ言へ秋風に
紅葉も落ち松もそ〳〵毎とそ来ぬ
風とともに冬ぞ来ぬ
残の雪も消へ初の雪
時雨
降るや菊山のふもとやもみぢ葉

かりそへて人もとはぬに秋の雲八時雨けりわそ思ふそなる　肥後

神なひにいはふ思ひはあらねとも今日しも時雨のあやしかりけり　紀伊

霜

ゆふされはかれのゝ草のつゆのまに霜おきまよふ月の影かな　公實

宮城野の露吹結ふ秋風に霜おきまよふ月の影かな　庭高

夜もすから神さひわたる榊葉に霜おきまよふ月の影かな　國信

いかにせん袖に朝夕置霜の消えてもとけぬ恋のしけきを　師頼

投捨てよ心の秋やれぬらん霜おきまよふ月の影かな　公重

年ふれは我もいかゝそ霜おきまよふ月の影かな　肥後

住吉のあまのつくりき行もあへす霜置冬の夜はのこゝろを　後朱雀

神垣のこゝろをしめよ霜おきてうけぬ榊のなきにしもあらす　師時

夜もすから霜や雪やとうかゝはれ霜おきまよふ月の影かな　別俳

おきまよふ霜の白菊折しもあれ霜の白菊　基俊

初霜よ籬のもみちうつろひぬ霜おきまよふ月の影かな　隆源

雪かとや朝ゐのかきに見えつらん霜おきまよふ月の影かな　肥後

おく霜八志のの小篠よあらねとも霜おきまよふ月の影かな　紀伊

霜降りのとろゝよさゆるみのうらも　河内

雪霜のとろゝよさゆるみのうらも　五實

国立国会図書館　タイトル『堀河院百首』　請求記号 857-38

ガラス使用

今こそ霜八門をさせれ共ものうき
あまりの機乃すゝやのもるこゑてしも
みち路こそ今も鶯ぬ山里は冬のよりみしも
今ぞ雪つもりつゝ我袖を我もまじもやなき
さよ衣さえ川風や枝のうれをよ雪ふる音
意ふそしもとぬ常ふれば後朝
よしの雪こそ雪ふりつゝ山里は道よ絶えやそれ師時
おくの柱の枝やの雪ひそ〳〵雪ふる
枝ふりつゝ雪もりそ我庵はまきみそ
ゆふこそ今あそ〳〵か暁の雪の音
枝のあくみ雪もりそや八百よやそ
うきこと言し俤よりの雪ふりて紀伊
あきかぜ白妙とそ山のそうまの
雪
ふりつゝ雪乃そ枝乃そも沈ふそ雪ふる公實
今そのそん来の松山浪こゝは峯共
吉野山雪の河上雪ふりこゝ嶺やそ
うきことも玉ゆけ雪のいく重積りぬ趣
志らくもの路の坂山を越くれん
越ふそ誰こそこん山へのそ

ガラス使用

鳥羽殿のうちめよ雪降ぬ
雪れいを多くらぬ山も
吉越まろ峯もみくぬ
奥山の松乃葉もの雪ふ
都をひ雪ふりぬ八ろくき
ろもなく流れ雪ひ処
白雪のふりもきぬれ八吉越
雑波江のあしもやも河
雪柏の野への色ぬれ雪ハ

宮菖

後教
師時
教仲
基俊
隆源
恥慶
俊仲
公実
河内
国信
師教
教季
俊恵
基俊
隆源

雪柏ふく花八愛めとみりをも
ぬるもうる西江の芦八雪そ
宮の内さまのふ凡吹度よ
鶯ふせ芦もぬふくよ柏ふく
雑波江の浪ますも乳利
雑波ふく縄もおなひく芦
重雪ハおひのり芦乃柏ふく
たおふく汀柏なきふ雪を
恒凡よもれよそわか柏菖の
冬ふ雪ふまの柏もし落ふく

かぶれ浮世乃業よ凡吹ハちどり渡の元ぐるま　肥後
きえ消よ家おやすミ雪雅波江の蓑虫毎ハ紙衣　紀伊
余波ゐのこゝろまゝの世乃秋を独さくかりよ　河内

千鳥

志ゝの浦の私吹凡ハちどりさびしき夕波くるゝなく〳〵　公賢
月数のはえて浦を渡行くハ子なくあけぬよハ　匡房
友くるゝもしまてたゝきに波乃白河よ淀や澪人　國信
よゝさ舞こゝぬその浦のさ波くるゝ〳〵　師教
歌そゝろにくるゝ志ハるく撥すゝきさ紀河原八川や吹　孔雀
指ちどりやゝ佐のさ浪よゝろにに暁うけくゝるゝなくゝり　伴宝

あすハ吹小浪う波の須ゝゐる岸川ぐるまさくなる　後教
春川くるゝ発よゝとゝさてのせ紀ゝきゝゐうくゐる唱　師時
凡ゝしゝやゝゆゝぬん志ゝる浦ゝ千ゐる岸ゝ　従仲
雪志ゝく渡波よゝぬさ保川乃ちどりハゝのゐる　嘉後
ゝやゝしき友や志ゐなねゝくゝ女ハきれの川原よゐる　澄源
白浪ゝゝゐゝて渓ゝゐる後のまゐくちどり唱　肥後
浦川の唱上の波ぬゝ海ゐる浪ちゝくゝゝゝゝ　紀伊
海てゝゐまのゝゐ海やて接ゝ河口　河口

氷

海ゝゝおのゝゝ流ゝゐぬゝゝ志ゐゝゐまゐゝハ砂志ゐげ　三実

河こそ冬も春に逢ふらめ　　匡房

ふゆごもりする河水のくるしきは
あつるれハ朝氷とくらん　　國信

あしのやの池の氷もとけそめて
あしのよの風のさそふらん　　師教

浪間てる月かけくたくひとさし
浪間（ママ）ゆく月の水　　匡房

あさなあさな見れハ氷のまさりつつ
あさなあさな見れハ池の氷こそ　　仲實

たえまおてはるるまもなき浪の音
たえまおてはるるまもなき浪の音こそ　　後朝

あしのやの池の氷もとけそめて
あしのやの池の氷こそ　　仲實

山門のゐてふる雪ハ消えせて
山門のゐてふる雪ハ消えせて　　匡房

鳴る八よふれ雪とや朝みまし
鳴る八よふれ雪とや朝みまし　　基俊

氷るらん月の雨（ママ）ふる日よりけに
氷るらん月の雨ふる日よりけに　　師時

冬ごもりする河水のくるしきは
冬ごもりする河水のくるしきは　　匡房

夏山のふもとやさとや落つらん
夏山のふもとやさとや落つらん　　紀伊

ふゆごもりする河水のくるしきは
ふゆごもりする河水のくるしきは　　河内

水鳥

朝ぐ猶氷みる池のうきねかな（暗）　　公實

ふるの池の底なき物思ひ
ふるの池の底なき物思ひ　　匡房

氷るらん月の雨ふる日よりけに
氷るらん月の雨ふる日よりけに　　師時

池水に羽風の氷さへ消えん
池水に羽風の氷さへ消えん　　師頼

よる波や打ち越水るおしの羽風
よる波や打ち越水るおしの羽風　　顕季

なかみさへ消えとのみるあちむれは
なかみさへ消えとのみるあちむれは　　仲實

国立国会図書館　タイトル『堀河院百首』　請求記号 857-38

ガラス使用

ふるれ共なをもゝはらぬ秋萩の
川そのさらさのれそうなるすゝ鴨の
水ぐきにおのさま衣重さくさゆう
もみぢきひかされてみるれ生そのの
浦ふーちうの武みうも有ものをいくく
池みうにされくおうある水ぐきの羽風に波やちさくく
池水のうへにいかゝきくゝ
ふるのうもなきものうへにあうく浪の花を秀よなん

後頼
師時
基俊
隆源
肥後
紀伊
河内

細代

ものくはの年のうちなる志うぬ

さゝ浪やをうの海のあり末に浪よ
田上の澤べなれみすれ我へつ我やきへ
細代をに郷すやうく田上のその
番人のうくゝ氷魚のこ
月吹風に川のあり末の
はれまにつまう細代の年業に
氷魚乃うるひうそうく田上やう
都みてくく田上川のあり末のいく
山川よ年のあり末を
多浪のもてゝおうくゝ細代

連房
國信
師頼
仲実
後教
師時の弟
仲実
基俊
隆源

国立国会図書館　タイトル『堀河院百首』 請求記号 857-38

ガラス使用

氷魚のよる川瀬をみゆる網代木に浪のよりくやそうぢ姫　肥後
網代木に浪のよりくやそうぢ姫　紀伊
隔もなく白浪うづむ網代木をおぼつかなしや夏のよるのうら　河内

神祇

天とつる榊のゆふやとりもあへず庭火の煙雲とみゆらん　公実
曙の星さへきらめく榊葉の霜うち掃ふ神垣のさと　定房
榊とりしめつるくれの冬のよに八束の小菅ちぢに乱れて　師頼
千早振神のみそぎを庭火もてとりけさらめやは神のしるしも　師頼
榊葉をおりくれのこしけさらめやは神のしるしも　匡房
庭火もてくれの空乃神まつはあふこちうれしき　仲実

うづみ火神のうれしきものをもの空つこ庭火白くも　後朝
ゆふかけてやそ私の神垣をおりあさ金の面白の那　師時
榊葉をおりくれのこしけさらめやは八的矢の空乃　仲実
庭火のの空あふ榊葉をおりくれのこしけさらめやは　基俊
榊葉やそ私の神垣をおりあさ金の面白の那　逢源
榊葉よゆふかけてやそ私の神垣をおりあさ金の　肥後
榊葉よゆふかけてやそ私の神垣をおりあさ金の　紀伊
榊葉よゆふかけてやそ私の神垣をおりあさ金の　河内

鷹狩

狩衣もりもん服の雲もりもんの白毛やうん　公実

国立国会図書館　タイトル『堀河院百首』　請求記号 857-38
ガラス使用

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]の煙もくれゆく世ゆゑ
すみこし風よ松嶺さえ小野山の雪ぞ
さびしき冬社ありそうれたるやど焼
もみ電よ新こうとなく冬くれ
深き雪のひやおくらん小野山の
みよ山里我機もそうの風よこうそうて煙
ほの山の冬のそ[illegible]
深み清に淀やくまま煙よ

燈火

堤火の下にこうくかしやる一清やこ[illegible]

後嶺
師時
教仲
基俊
隆源
紀伊
師時
基俊
隆源
河内

やよ堤くまさきこうく堤火八舞なきのくふこうれ社
よこともなれ堤火を松の[illegible]冬れ社
堤火の下にこうくこそ[illegible]
山里に獨かうよ[illegible]
こうくもよ雪はこうる[illegible]
いかもん炭の下なう堤火のこうれての
堂のなる斗そ堤火のそこへせあ常八春あこうち
堤火八舞もうんのうかうへ八法きるくふこうる
下かへよ[illegible]
堤火のあこうれ冬八海こうさ

為家
国信
師教
教長
俊光
信実
教仲
基俊
師時
隆源

国立国会図書館　タイトル『堀河院百首』　請求記号 857-38

ガラス使用

857
53

ことのおもむきなどよおもひ
あまたのわすれがたきなどよおもひ
出でつゝ書ハ讀よ夜ハ寢よ
月ハ十月ありて二日の
いつかハわすれもあへぬ人
みのもとにもたらひそもたらひ
るまゝハ我身の老となる
ばうるも我世をおもふ
なみだ流さゝる
誠川院百首和歌寒中旬

後教
師時
敎仲
基俊
隆源
北後
紀伊
河内

おもやうとしなどうちうかべ
れ夜ハ冬のまゝ
ふりぬ
ハつれなきハ
涂夜
あすよりハ
吉野川ふりくすこ
何事を
はるくてしもよなれ
門出ハいつこそそれ
ふもと
公実
通季
國信
師教
重基
仲実

北後
紀伊
河内

国立国会図書館　タイトル『堀河院百首』　請求記号 857-38

ガラス使用